

## 適応指導教室で何が起こっていたか クローバーの実践とその課題

立命館大学応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
家族機能・社会行動クラスター

適応指導教室「クローバー（仮称）」においてアルバイトスタッフとして働いていた筆者が抱いた疑問点を、一般的な適応指導教室の傾向と比較することで、クローバーの問題点や課題を明確にする。さらに適応指導教室全般の現在の問題と今後の課題を考察する。最後に適応指導教室の今後の展開を指摘し、不登校児支援の充実を期待する。

まず、適応指導教室は「不登校児童生徒に対する指導を行うために教育委員会が、教育センター等学校以外の場所や学校内の余裕教室等において、学校生活への復帰を支援するため、児童生徒の在籍校と連携を取りつつ、個別カウンセリング、集団での指導、教科指導等を組織的、計画的に行う組織として設置したもの」「教育相談室のように単に相談を行うだけの施設は含まない」（文部科学省、2000）とされる。不登校児童生徒を対象とする機関として設置されたが、不登校児童生徒の約1割しか利用していない現状がある。特に対象者の中でも非行・怠学傾向とされる児童生徒は入所しにくい。

多くの適応指導教室は学校のように時間割を作り学校復帰を第一目標にしたスケジュールを採用している。それに対してクローバーは一人一人の個別的な事情に合わせ安心感のある楽しい居場所を提供しようと試みた。元気になることが重要で、早急な学校復帰は目的としていないという方針がうかがえる。

両者を比較していくと、確かに活動方針に違いは見られたが、問題点は大きく重なっていたことが明らかになった。クローバーで指摘された問題点がクローバーのみならず、適応指導教室そのものが持つ多くの矛盾点だったと考えられた。

制度や職員体制については、目標設定とその達成度の不明確さ、非常勤職員の割合の多さ、情報が共有されない点が共通していた。活動内容については、不登校経験のあるスタッフの影響もあり、ゆるやかな枠組みになっている点がクローバーの特徴である。それ以外に問題行動が起きた時に対処できないこと、進路ガイダンスや学力の保障が十分に行われていない点は共通した問題点と思われた。特に各自治体によって活動が異なることになり全国的に統一されたカリキュラムはないため、各活動の成果を明確にすることが求められている。しかし、活動の成果を考察している研究は少なく、どのような活動でどのような効果があったかという実態は明らかにされていない。これは設置を促した国が行うべき課題だろうと思われた。他には保護者や学校との連携や施設設備の充実も求められている。

以上、クローバーの活動を検証し問題点を指摘したが、今度は肯定的な特徴を見ていく。クローバーをよりどころとする通所児の中には楽しんで通ってきている者が存在する。また、気楽にリラックスしていたという児童生徒の声も聞かれた。自分のことや気持ちを話していたことから、通所児にとって安心して過ごせる場になっていたとも考えられる。個別の要望に答える形で同行登校を行ったことなどから、個別性を重視する点がクローバーの独自性と思われた。

通所児は主に学校に行きたいのに行けないという心理状態にあると判断された者である。

その者達の中には楽しく、安心できる場を与えれば、自らを語ったり自分の意思を示し行動したりする者もいると考えられる。そして再び学校に復帰することにもつながることもあると考えられる。

クローバーでは学校へ行きたくなければ行かなくてもよいと通所児にメッセージを送ってきたが、通所児自身が復帰を望んだ際の支援を準備しておくことが必要ではないかと考えた。学校復帰を志向しないことで復帰段階の支援を行っておらず、通所児自身に任せきりになっていたためである。さらにクローバーでは学習活動や進路ガイダンスの機会を得るためにも在籍学校とのつながりを大切にしておくことが必要と思われる。

今後の適応指導教室全体の展開としては、各教室の活動実態を調査し、効果的な支援体制を目指していくことが必要と考えられる。また、適応指導教室では対象となっている児童生徒全員を受け入れられない現状があり、改善が求められる。さらに、現在の通所児と合わないとみなされ、意図的に対象とされていない「非行・怠学」と言われる者も本来は対象者であるため、支援を行う必要がある。しかし現在の機関に全員を集めれば、合わない者も出てくるだろう。そこで、各児童生徒の個別性を把握した上で、学習の補習を行う機関や非行・怠学児を対象とした機関を地域に設置していったらどうかと考えた。個別性を把握するためには対象者へのアセスメントが必要になると考えられる。